

1980年出土の木簡

三重・西沖遺跡

瓦、山茶碗、製塙土器、須恵器、青白磁などがある。
城館跡は『三国地志』に浜田氏堡とあるものに比定され、幅約五

1 所在地

三重県阿山郡大山田村広瀬字西沖

2 調査期間

一九八〇年（昭55）七月～一九八一年（昭56）二月

3 発掘機関

三重県教育委員会

4 調査担当者

田中喜久雄・早川裕己・森前 稔

5 遺跡の種類

集落跡

6 遺跡の時代

古墳時代～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は服部川左岸の標高一四三m前後の河岸段丘上に位置し、県

営ほ場整備事業の事前調査の試掘による結果、約二万m²に及ぶことがわかり、今回中心部約五千m²について本調査を実施した。

遺跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけての堅穴住居跡群、平安時代後半頃の掘立柱建物跡群及び、室町時代の城館跡からなる。

堅穴住居跡は約九〇棟が検出され、その多くは重複している。遺物には土師器、須恵器、黒色土器、鐵製紡錘車、砥石などがある。

掘立柱建物跡は約一〇棟位あり、その規模は一×二間の総柱の倉庫から五×四間の総柱の建物まで様々であり、その建物に伴うと推定される柵や濠、井戸もみられる。また、建物跡は棟方向が揃うなど計画性が窺える。出土遺物は大半が瓦器であり、他に土師器、



8 木簡の釈文・内容
「□□□×」
(115)×(22)×1 081
この木簡は、井戸の最深部にあたる標高一四一m前後の埋土より出土した。尚、確認場所は井戸内ではなく、排土として埋土を井戸から井戸上面付近に上げた地点である。文字は三字ある。
尚、木簡解説については、平城宮跡発掘調査部史料調査室の御指導と御援助を受けた。

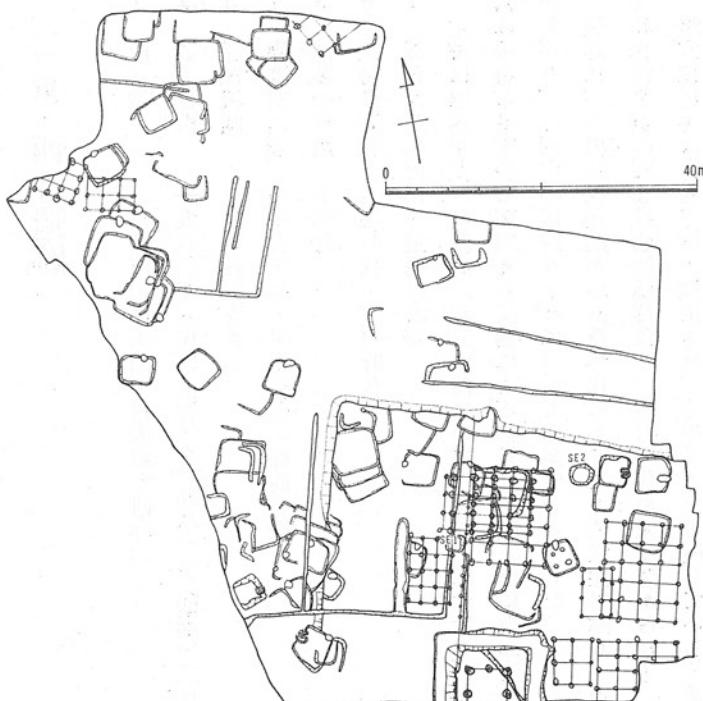
9 関係文献

早川裕己 「西沖遺跡」『昭

和五十五年度県営圃場

整備事業地域埋蔵文化

財発掘調査報告』



西沖遺跡遺構配置図

静岡・御殿・一二之宮遺跡

所在地 静岡県磐田市御殿・一二之宮

調査期間 一九七八年（昭53）十月～一九八〇（昭55）年三月

発掘機関 磐田市教育委員会

調査担当者 平野和男・山崎克己・中嶋郁夫

遺跡の種類 宮衙・集落跡

遺跡の時代 弥生時代～室町時代

遺跡及び木簡出土遺構の概要

御殿・二之宮遺跡は、磐田原台地の南端が沖積平野に埋没する付近に位置する。遺跡周辺は現在、比較的起伏の少ない地形となっているが、本来は大小の埋没谷と段丘の発達した地形であったことが、調査によつて確認されている。

一九七八年十月より、市内南部を流れる久保川の河川改修工事に伴う事前調査を実施した。その結果、当遺跡からは弥生時代～室町時代に及ぶ多数の遺構、遺物が検出された。また、微量ではあるが先土器時代のナイフ形石器や縄文土器片も出土している。

このうち、奈良・平安時代に属する主な遺構として、井桁組みの井戸、倉庫風掘立柱建物、貝塚、敷石状遺構、柱穴、土壙、溝等があげられる。これらの遺構のなかで、掘立柱建物は先述した小段丘